農村流通システムの変遷にみるエジプトの地域性

加藤　博

1．なぜ「農村流通システム」なのか

私の専門は近代エジプト社会経済史であり、現在私が実際にやっているのは19世紀中葉、いまから150～160年前の小さな村、あるいは遊牧社会に起きた争いごとを裁判文書で起こし、それを聞き取り調査と比較することである。要するに文書で起こしたものと、現在それがどのように伝わっているかを比較して、19世紀から現在までエジプト社会が近代化の中で、どのような変容を受けたのかをミクロなレベルで検証しようとしている。したがって、極めて具体的なことにこだわった研究を進めているわけであるが、そのためであろうか、それとは逆に研究対象を抽象化してみたいという欲求も一方にある。例えば、自分の研究対象をイスラム社会論という形で提示してみたいという気が起きている。

たしかにエジプトは、イスラム世界にあっては非常に特異な水利農耕社会である。しかし、そのエジプトでさえもイスラム世界を知るためのキーワードである都市、商人、貨幣、流通とかの言葉を抜きにして、前近代はもちろんのこと、現代のエジプト社会でさえ論じられない。具体的にはムカーウィル（請負業者）だとか、ムアッリム（親方）とか呼ばれる人達が、エジプト社会で果した役割などに注目している。私はこのような問題関心を土地制度、あるいは税制度という社会経済史研究にとって、極めて古典的なテーマを追う中で持つに至ったのであるが、その過程で流通システムや市の運営に関しても興味を抱き、数本の論文を書いた。来年あたりにはこのテーマをより深めるため、農村流通機構を主題にエジプト研究者と共同研究をするつもりである。

近代エジプト史研究にとって農村流通システムは、近代化論的な史観（「農村」と「都市」、あるいは「国内経済」と「国際経済」の二項対立を前提とした史観）を克服するための研究領域である。これまでエジプトも近代化論的史観に基づく研究が主流を占めたが、それを単純に図式化すると次のようになる。エジプトにおいて農村は、都市とは交流のない孤立した空間であり、都市は農村の海の中の島みたいな空間で、政治の中心であった。その中で農村を都市と結びつけ地域経済、地域社会をつくり出し、農村と都市をまき込んだ市場メカニズムを機能させるようなインパクトを与えたのが1798年のナポレオン・ボナパルトのエジプト遠征であり、ここに初めてエジプトにおいて、地域経済から国民経済へと経済が発展する素地が築かれた、とされたのである。

ところで、このような近代化論的史観に対して、1970年代以降様々な議論がなされてきたが、

近代化論的な史観に対抗し得るほど説得力を持つ議論は少なかった。その最大の原因は、反論のためには農村と都市、あるいは国内経済と国際経済を結びつけるような農村部の流通システムの実証的な解明が不可欠であるが、それがほとんどなされてこなかったことである。近年になってようやく参考文献に挙げたケネス・クーノー（歴史学者）の業績のように裁判文書、あるいは徴税文書に依拠し、18世紀から19世紀にかけての地域経済の実態を明らかにしようと試みられるようになった。

2．エジプトの「地域性」とは

さて、本日はこの農村流通システムにおけるエジプトの地域性を論じるわけであるが、エジプトの地域性については、これまで改めて地域性とは何かを定義せずとも、すでに大昔からエジプトは一貫してまとまりのある地域と捉えられてきた。つまり、エジプトの地域性は自明なものとされてきたわけで、その根拠は常にナイルに帰せられてきた。

その象徴が、歴史学の父と呼ばれているギリシアの歴史家ヘロドトスの『歴史』に見られる「エジプトはナイルの賜物である」という文言である。これはナイルがエジプトにもたらす恩恵が巨大であることを述べた文言であると理解されてきた。しかし、ヘロドトスはこの文言を、エジプトのナイルデルタはナイルの沖積作用の結果、でき上がったものであり、まさにエジプトはナイルの賜物であるという即物的な意味で使っている。それはともかく、ヘロドトスの『歴史』全９巻のうち第２巻がエジプトの民俗誌にあてられ、その中でヘロドトスは、ナイルの氾濫についての驚きを『ナイル河が氾濫しはじめると、河べりの凹地や低地帯が先ず河から滲み出てくる水で満ちはじめる。そして水が満ちるとほとんど同時に、一面に小魚でいっぱいになる』（松平千秋訳、岩波文庫）と表現している。しかし、これは明らかに間違いで、ナイルの河岸の畑には運河で水が引かれるわけだが、ナイルが氾濫する状況が、ヘロドトスにとっては、あたかも川底から水が滲み出てくるように緩慢であったところから、このような表現となったと思われる。このようにヘロドトスのナイル氾濫の叙述が正確さを欠くところから、ヘロドトスがナイルの氾濫時に実際にエジプトにいて、それを観察したのか疑問視する向きもある。しかし、ことナイル氾濫後の彼の記述については、19世紀においてエジプトの灌漑システムが自然灌漑体系から通年灌漑体系へ移行するまでのナイルの水による農耕状態を、実に見事に表現している。つまり『ナイルが水嵩を増す時には、デルタ地帯ばかりでなく、いわゆるリビア領やアラビア領のあちこちで、両方面それぞれ実に２日行程の距離にもわたって――時によってはそれ以上のこともあり、またそれに及ばぬこともあるが――氾濫する』そして、

『ナイルが国土に氾濫すると、水上に現われているのは町々だけとなり、その様はエーゲ海上に浮ぶ島嶼さながらである。すなわちエジプトの全土は大海と化し、町々だけが水上に現われているのである。このようなことになると、水を渡るにももはや河流に沿うことはなく、平野の真唯中を行くことになる。例えばナウクラティスからメンピスへ遡航するのに、実にピラミッドの傍を通って船が進むのである』。そして、その後の農耕について、『実際現在のところは、この地域の住民は、あらゆる他の民族やこの地域以外に住むエジプト人に比して、確かに最も労少なくして農作物の収穫をあげているのである。鋤で畦を起したり、鍬を用いたり、そのほか一般の農民が収穫をあげるために払うような労力は一切払うことなく、河がひとりでに入ってきて彼らの耕地を灌漑してまた引いてゆくと、各自種子をまいて畑に豚を入れ、豚に種子を踏みつけさせると、あとは収穫を待つばかり。それから豚を使って穀物を脱穀し、かくて収穫を終えるのである』と記している。こうした状況は19世紀の中葉までエジプトにあったものである。このように観察者にとって、エジプトの神秘はナイルの氾濫を見た驚きに端を発していたといえる。その驚きはナイル水源の謎を生み、19世紀の60年代におけるスピークとグラントの白ナイル水源の発見まで続くナイル水源探索史が展開されることになる。我々はしばしばナイル峡谷――英語でナイルバレー、アラビア語でワーデーニール――という言葉を使うが、この言葉はナイル水源探索史と結びついた地理上の表現である。

19世紀の前半、エジプトのスーダン征服によってエジプト領スーダンが成立する。以後、エジプト領スーダンを含む「大エジプト」という意味で「ナイル峡谷」という言葉が使われるようになる。それは、地中海からビクトリア湖までの白ナイル流域を指し、白ナイル水源探索と結びついた政治的概念である。それまではエジプトにとって重要だったのは白ナイル流域ではなく、青ナイル流域、つまりエチオピア方面への流域であり、そこには金鉱山、流刑場、紅海に抜ける交易ルートがあった。ところが、白ナイル水源の発見以降、ナイル峡谷が意味する流域は白ナイル流域、すなわちビクトリア湖方面の中央アフリカ、ブラックアフリカへと向かう地方へと移っていく。それはヨーロッパ列強のアフリカ争奪戦と結びついたものであり、現在のスーダンも、この「ナイル峡谷」に建設された国家である。

それはともかく、こうしてエジプト人は、古来一貫してナイルの水に依存して生活してきたわけであるが、このナイルの氾濫に見られる特異性をもって、エジプト人の独特な性格の根拠とされてきた。例えば、ヘロドトスも『エジプト人はこの国独特の風土と他の河川と性格を異にする河とに相応じたかのごとく、ほとんどあらゆる点で他民族とは正反対の風俗習慣をもつようになった。例えば女は市場へ出て商いをするのに、男は家にいて機織をする。機を織る

にも他国では緯を下から上へ押し上げて織るのに、エジプト人は上から下へ押す。また荷物を運ぶのに男は頭に載せ、女は肩に担う。小便を女は立ってし、男はしゃがんでする。一般に排便は屋内でするが、食事は戸外の路上でする』と述べ、以下、エジプト人の独特な性格の具体相が延々と記述される。そして、エジプト、あるいはエジプト人が他国、あるいは他民族と違うという観察は、必ずしもヘロドトスのような――もっとも彼をヨーロッパ人と呼んでいいのか疑問だが――ヨーロッパの旅行家だけではなく、アラブ人、またはイスラム教徒の旅行家もまったく同じようになしている。また、このエジプト人の独特な性格については、観察する側のみならず、観察される当のエジプト人にもまた意識されている。

例えば、現在において「エジプト的性格」という表現があるが、エジプト人は何か問題あるとその原因を突き詰めず、「我々はエジプト人だから」ということで済ましてしまうことが多い。このいわば思考停止みたいな形で自分たちの独自性を持ち出す点において、彼らは我々日本人と同じ精神構造を持っている。このように観察する側もされる側も、大昔から現在に至るまで、エジプトは特異な空間、そこに住むエジプト人は特異な人々であると意識してきた。

3．エジプト農村流通システムの地域性

さて、こうしたエジプトにおいて、農村流通システムはどのようなものであったか。先ず指摘すべきは、エジプトは典型的な水利農耕社会であり、実に多くの定期市が存在したということである。それも数が多いのみならず、よく組織されている。今日、市が立つのはほとんど金曜日（イスラム教徒にとっての休日）以外の日である。このこと一つをとっても、現在に至るまで、市が日常的な経済空間として機能してきたことが分かる。金曜日に市が立つのは、都市部の特殊な市であり、例えばカイロのらくだ市などである。

表1　下エジプト3県所在週市関係データ表

市番号	市名（市開催日）	人口 (1)	市域村数	市人口 ① (2)	市人口 ② (2)	最長村距離 (km) (3)	鉄道輸送量			水上（ナイルおよび運河）輸送量		鉄道での綿花、綿花種子輸送量		水上（ナイルおよび運河）での綿花、綿花種子輸送量		綿花市場	家畜売買の有無 (4)	1934年開催の週市 (5)
								商品（トン）家畜（頭数）乗客（人数）				C 綿花（kg） CS 綿花種子（kg）		C 綿花（梱数） CS 綿花種子（梱数）				
								到着	発送	到着	発送	到着	発送	到着	発送			
(1)	カリュービーヤ県 カリューブ郡 Izbet Shalaqan	5,302	13	12,573	22,316	11	M A P	15,924 648 683,639	13,424 48 648,614	4,314	163	C 490 CS 46,190	0 11,922,000	C 223 CS 2	107 23	○	○	
(2)	Qaha	3,442	1	635	1,269	3	M A P	4,007 301 34,752	3,430 248 39,147	–		C 7,310 CS 85,150	1,092,950 500	–			–	
(3)	Qaliub	14,648	38	45,197	83,179	15.5	M A P	17,284 2,471 201,149	4,214 1,775 190,277	–		C 0 CS 0	1,703,320 212,020	–		○	○	月
(4)	Tenan	5,983	15	15,479	41,060	9		–		–			–	–			○	水
(5)	Shubara El Khema	4,580	2	1,181	2,679	3.5	M A P	1,718 1,909 35,577	2,847 642 44,860	2	0	C 0 CS 0	1,090 4,530	–			–	
(6)	ナワ郡 Balaqs	3,190	14	16,770	37,452	7.5		–		–			–	–			×	
(7)	El Khanaka	6,253	11	11,651	26,607	11		–		1	0		–	–			○	土
(8)	El Qashish	2,028	9	7,546	19,801	8		–		–			–	–			○	
(9)	El Marg	3,396	10	11,032	23,617	5.5	M A P	6,172 256 80,450	2,432 393 96,601	–		C 0	405,880	–			×	

1898年、第1回の人口センサス（その後、ほぼ10年ごとに行われる）に合わせて、各村落の住民に「あなたは何処の市に行っていますか？」という質問がなされ、その回答が3つの県（ダカフリーヤ県、シャルキーヤ県、カリュービーヤ県）について整理されているが、その回答結果を市ごとに整理し直したのが、表1（ここに示したのはその一部であり、そのすべてについては、参考文献(4)(6)を参照）である。そこには、鉄道とナイルの交通事情、当時の植民地経済における主要換金作物であった綿花関係の統計、その綿花の売買に特化した綿花市場（ハラカ）と家畜市の所在などの情報ももり込まれている。

1898年というのは、イギリスの軍事占領下に置かれたエジプトにおいて国家が農村流通に積極的に介入し、エジプト・マーケット・カンパニーという会社を作り、定期市の統廃合を図った非常に重要な年である。そのためこの資料は、国家が農村流通に介入する以前の定期市状況を示しており、その後の定期市の展開を知るための基準となる資料として重要である。

図1は、カリュービーヤ県カリューブ郡の定期市の市場圏に関する情報を地図化したものであるが、この地図からだけでもエジプトにおいて、定期市が繁栄し、組織されていたことがわかるであろう。この状況は参考文献(2)のクーノーの研究で指摘されたように、18世紀においても見られたと考えられる。更には参考文献(7)に見られる佐藤次高のファイユーム地方の社会史研究から判断する限り、基本的には同じ状況が中世においても観察されたものと思われる。勿論、人口の規模によって定期市の数、運営のされ方に変化が見られたであろうが、定期市が一貫してエジプトの農村部において、重要な経済的機能を果していたということは間違いのないことである。

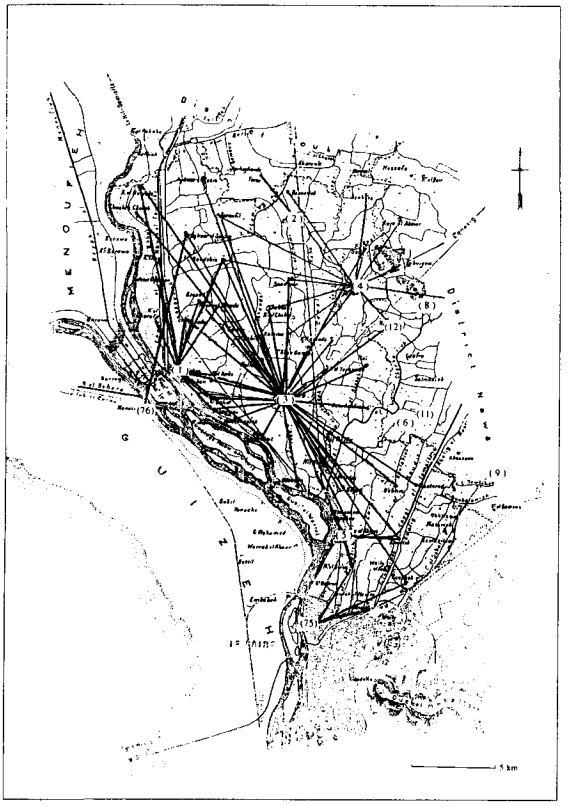

図1 下エジプト3県に所在する週市の郡別市場圏図のサンプル

それにもかかわらず、エジプトの定期市について理論的考察を加えた文献はほとんどなく、その貴重な例外は参考文献(1)のア

メリカの社会学者ラーソンによる論文である。彼女の論文はキャロル・スミスの研究に依拠し、そこで指摘された5つの流通システムの型のうちエジプトに適用できるものとして、solar central－place system、dendritic central－place system、interlocking central－place system の3つの型を挙げている。また具体的な市の類型として、village market、town market、religious market、major entrepôt の4つを挙げている。ラーソンは300年にわたる流通システムの変遷を追おうとしたが、実際には実証的な統計、叙述が揃うのは19世紀に入ってからであり、彼女の記述のほとんどは、19世紀以降の国家による農村流通への介入を跡づけることにあてられている。その中から彼女は、エジプトの流通システムが18世紀から現代までの300年間に、solar, administered type of market system からdendritic , monopolistic system へ、そしてさらに、system that combines elements of several types へと変遷したと結論づけている。彼女の記述から一貫して伺えるのは、エジプトでは経済流通システムと国家権力とは昔から密接な関係にあり、時代時代の流通システムの違いは、この両者の結びつき方の違いに基づくということである。

ラーソンの論文をふまえて、エジプト農村流通システムの地域性についての私の見解を述べてみたいと思う。論じたい点はいくつもあるが、ここではラーソン論文との関係から、農村流通システムと国家との関係についてのみ言及することにしよう。さて、私がラーソンの論文に物足りなさを感じる一点は、彼女の市の類型に関してである。つまり、市を village market と town market に類型化することに対する疑問である。

そもそもエジプトの場合、ヘロドトスの言葉からも判断されるように、集落はナイル氾濫のときに浸水しない高いところに立地したという程度の規則性しか持たずに展開し、かつそれらは、人々がまとまって住む極端な塊村形態をとっていた。その大規模なものが都市だが、カイロやアレクサンドリアのような突出した政治の中心地を別にすれば、その他の地方都市は、ほとんど19世紀後半以降のエジプト社会の近代化、人口の増加過程の中で形成されたものであり、それゆえに、農村部における village と town の区別は必ずしも明確ではない。実際、私が19世紀中葉の通行税関係文書を検討した結論（参考文献(3)を参照）は、農村における市も、地方都市における市も、商われている商品、そこで活躍している商人に関してそれほどの差はなく、あっても量的な差であって質的な差ではないというものであった。したがって、village market と town market という市の類型化はエジプトの定期市を考察する際にはあまり有効ではなく、それに代わる市の類型化が試みられねばならないと思われる。

それではどういう類型化が可能か。私としては、「家畜市」と「野菜市」という類型化を主

張したい。つまり、農村市と都市市という市の立地空間を基準にした分類ではなく、市で商われている財を基準にした分類である。ラーソンは village market と town market の違いとして二つの点を挙げている。一つは商品が品物ごとに並べられているかどうか、他の一つは売り手が市場税を払っているかどうかということである。しかし、現在のエジプトでは市場税を徴収する市とそうでない市が同じ空間に立ったり、混じっていたり、隣合わせになっていたり、同じ地区ではあるが離れたところに立ったりという形で、市場税徴収の有無で village market と town market を区別することはできない。市場税を徴収されるのは特定の商品の市場だけである。例えば、野菜を売っている市場では市場税は徴収されない。したがって、空間を基準に分類するよりも、売られている商品を基準に分類する方が、エジプトの市を理解するのに有効である。ここで家畜市というのは、家畜に代表される財が商われる空間である。つまり、高い商品価値を有し、差益的な取引の対象となる財が売買される空間である。一方、野菜市というのは、野菜に代表される財が商われる空間である。つまり、食糧品、日用品など等価性に重きを置く、生活必需品一般が売買される空間である。

「家畜市」の場合、定期的、かつ長期にわたって継続的に運営される可能性が高く、近代的なマーケットシステムが国内の隅々にまで普及しない限り、時の経過と共にその定期性を強めることもあり得る。エジプトにおいて60年代の社会主義体制がとられたとき、おそらく農村部における定期市の再活性化があったと考えられるが、この場合、定期市は時代とともに常設店舗へと移行するのではなく、社会主義体制という経済的、社会的な条件のもとにおいて、「家畜市」はその定期性を強めたということである。理由は、そこで商われる財の性格から、国家権力がこの種の市の運営に介入し、時としてそれを直接統制下に置こうとしたからであったと考えられる。

実際、「家畜市」は他の市と区別され、フクーミー（アラビア語で「政府の」という意味）の市と呼ばれている。この種の市が立つのは地方行政の中心（アラビア語でマルカズ）である。具体的には郡庁所在地（マルカズ）である場合が多い。これに対して野菜市の場合は、そこで商われる財が日用品、食糧品を中心とした生活必需品であるため、国家権力から介入を受ける程度が少なく、現在において「野菜市」は「家畜市」との対照から「女の市」と呼ばれることもある。この種の市は市が立つ地域の人口に応じて、その規模を変化させるが、あまりに人口が増加した場合には、一つの「野菜市」は複数の「野菜市」に分割されるか、毎日市、あるいは常設店舗、常設市に吸収される。そのため「野菜市」の定期性は容易に失われ、長期間にわたる継続的運営は望めない。したがって、「野菜市」は時代の経過とともにその運営のあり方

を大きく変化させると考えられる。

現在、エジプトでは「家畜市」の定期性が更に強められる傾向さえ見られる。エジプトの場合、役畜用の家畜の需要は、農業の機械化によって減少しつつあるが、逆に食肉用としての需要は急激に増加している。他方、「野菜市」の場合には、その定期性がだんだん失われ、毎日市に吸収される傾向が強い。

ところで、近代エジプト史を振り返ってみるならば、定期市と国家権力との関係において注目すべきは、すでに19世紀の前半の早い時期から国家権力は「家畜市」のみならず「野菜市」に対しても目配りをしていたということである。もっとも、国家がこの２つの市に介入する目的は異なってはいたが。

資料１　「農業法」（1830年）

第三八条…村落住民あるいは村落に住む肉屋が、規則（awāmir）に違反して、弁解の余地なく雌の家畜、あるいは年齢が三歳になる前の雄の牛あるいは雄の水牛を屠殺したり、肉屋が定められた以上の価格で肉を売ったり、目方を偽って少なくしたり、さらには、理由なく、後述する規定に違反して家畜を屠殺したような場合、調査の後、かかる行為をおこなった者に対して、初犯の場合には、100回のムチ打ちの刑が、再犯の場合には、150回のムチ打ちの刑が科せられる。しかしながらイードル・アドハー（'īd al-adhā）、アフマド・バダウィー（al-Sayyid Ahmad al-Badawī）師やイブラヒーム・ドスゥーキー（al-Sayyid Ibrāhīm al-Dasūqī）師の生誕祭のような祭日においては、たとえ年齢が三歳未満であったとしても、雄の家畜であるならば、屠殺してもよい。他方、不妊の雌の家畜、子供を生むことが期待できない老いた雌の家畜、そして、すでに体の一部に損傷を受けている雌の家畜については、州長官（マアムール）あるいは地区長官（ナーズィル）（nāzir al-qism）によって以上のことが確認された後ならばこれを屠殺してもかまわない。

国家権力の「家畜市」への介入を示す例として、まず資料１として挙げた1830年の農業法を見てもらいたい。この農業法はエジプトにおける最初の近代的刑法である。エジプトの社会が水利農耕社会であることから容易に想像されるように、初めての近代的な刑法は農村および農民を対象にした。その38条には、『村落住民あるいは村落に住む肉屋が、規則に違反して、弁解の余地なく雌の家畜、あるいは年齢が３歳になる前の雄の牛あるいは雄の水牛を屠殺したり、肉屋が定められた以上の価格で肉を売ったり、云々…』という文言がある。更に11条には家畜購入者に対して、村長と村役人は監視すべしという文言もあり、国家が家畜に対する目配りを通して、農業を管理しようとする強い意図がうかがわれる。この国家の目配りは家畜だけではなく、サーキヤと呼ばれた揚水車にまで及んでいる。

資料２は、1858年に公布された通行・市場税の新規則で、その内容は地方当局に、混乱して

いる通行・市場税を整理するため、どのような財に対してどれだけの額の通行・市場税が徴収されているかを調査、報告させ、それに基づいて報告書の要約と新たな規則の作成を命じたものである。その項目1が家畜についての規定である。その中に、農業法と同じ内容の文言が見られることが分かるであろう。

資料2　「通行・市場税」新規則（1858年）

○　1歳から3歳まで（の牛、水牛）に対しては、1頭あたり2キュルシュ、4歳から8歳までに対しては、1頭あたり3キュルシュ、そして9歳以上に対しては1頭当たり100フィッダが徴収されることになる。（こうして、9歳以上の牛、水牛に対する徴税額は低いのであるが、）それは、この歳になった家畜は、それより若い家畜と違って、役畜として役にたたず、最低の価値しかもたないからである。ところで、この二種類の家畜購入者は、その購入を、ある時は蓄財あるいは農作業のために、ある時は肉屋（jazzārīn）での屠殺のために行っているが、（後者の）対象は、蓄財と（農）作業にとって役に立たない家畜である。そこで、肉屋に売却されるこうした役立たずの家畜に対しては、それが屠殺にしかむかないということが確かめられたならば、「通行・市場税」は徴収されてはならない。（項目1より抜粋）

○　この商品（タマネギ）は貧乏人の食料品（ma'kūlāt al-fuqarā'）の一つでもあり、他の地点においては、かかる徴税措置はとらわれていない。（項目76より抜粋）

以上、国家は家畜に対して大きな関心を払った。それは家畜が財としての商品価値が高いことと並んで、国家の農業政策の遂行にとって重要であったからである。他方、野菜はその対極にある財であるが、この財についても国家の介入が見られた。例えば、項目の76はタマネギについての規定であるが、そこで、タマネギという商品は農作物であり、タマネギがとれる土地にはハラージュ、つまり土地税が課せられている。したがって、税は農民から徴収されているので、さらに通行・市場税を徴収するには及ばないと規定された後、この商品に通行・市場税が課されない理由として、タマネギは貧乏人の食料品の一つであることがつけ加えられている。したがって、タマネギ市場への国家の介入は同じ介入でも、家畜市場への介入とはその性格を全く異にしたのである。

私の言いたかったことを整理すれば、まず第1に、エジプトの定期市を分析する場合、「農村市」対「都市市」という市が立つ空間を基準にした分類よりも、「家畜市」対「野菜市」という商われる財を基準にした分類の方が有効であること。第2に、この分類を採用することによって、エジプトにおける流通システムと国家権力との関係を明確に描き出すことができること。そして第3に、実際近代エジプトにおける国家の農村流通システムへの介入は顕著であり、それは家畜のような高い商品価値を有する財から、野菜のような生活必需品にまで及んでいたことである。そして、それはナイルの水に規定されたエジプトの地域性と深く結びついたもの

であった。

参考文献

(1) Barbara K. Larson, "The Rural Marketing System of Egypt over the Last Three Hundred Years", *Comparative Studies in Society and History*, 27 (3), 1985.

(2) Kenneth M. Cuno, "Commercial Relations between Town and Village in Eighteenth and Early Nineteenth-Century Egypt", *Annales Islamologiques*, 24, 1988.

(3) 加藤博「19世紀中葉エジプトにおける税制度 その2.通行・市場税」『東洋文化研究所紀要』103冊, 1987年.

(4) ———「エジプトにおける社会経済変動と空間編成の変容 近代エジプト『定期市』研究序説」伊能武次編『中東における政治経済変動の諸相』アジア経済研究所, 1993年.

(5) Hiroshi Kato, "Urban and Rural Societies in Mid-*19*th Century Egypt——As Reflected in Some Unpublished Documents Relating to Taxation Systems", *The Proceedings of International Conference on Urbanism in Islam*, vol. 3, Tokyo, 1989.

(6) ———, "The Data on Periodical (Weekly) Market at the End of the 19th Century in Egypt——The Cases of Qaliubiya, Sharqiya and Daqahliya Provinces", *Mediterranean World* XIII, The Mediterranean Studies Group, Hitotsubashi University, 1992.

(7) 佐藤次高「イスラム社会史への視点 ファイユームの事例から」『中世イスラム国家とアラブ社会』山川出版社, 1986年.

(8) 奥野克己「上エジプトの定期市 アスワン県の事例」「イスラム圏における異文化接触のメカニズム」プロジェクト班『イスラム圏における異文化接触のメカニズム 市の比較研究(2)』東外大AA研, 1990年.

コメント

應 地 利 明

私は人文地理学を専攻しており、現代の定期市について、南インドで調査した経験がある。そういうことを踏まえて、簡単にコメントを述べたい。

農村流通システムを構成する一つの拠点として、市に注目されている。市に対する国家の介

入、目配り等が財の性格によって違うというところに、発表の力点が置かれている。国家の家畜市を通じての目配りの強さが、水力国家エジプトの性格をあらわすというところまで、話は発展していくのだろうと思う。一口に農村流通システムといっても、都市で生産される都市的生産物が農村市場へ下方流通としていく場合と、農村的な生産物が都市に向けて上方流通していく場合とでは、基本的な市場システムの違いがあるのではないか。

私達の分野でいう中心地理論、それをもとに展開していった様々な研究成果に基づいて、ラーソンの論文にある3つの流通システムが要旨に掲げられている。Solar central－place system は、ちょうど細胞の核にあたる中心地があって、太陽が衛星を支配しているようにその中心地がまわりを支配しているという体系である。これはチューネンの孤立国モデルに極めて近い。そして、Dendritic というのは、西アフリカなどに見られるように、海岸部に港を持つ都市があり、そこから鉄道が延びて、その末端に小さな市場があるというような体系である。そして Interlocking というのは、我々のいうところの中心体系であり、各中心地が相互に競合しあいながら全体の網状組織を作り上げているようなシステムをいってるわけである。

都市的な生産物は、その時の支配の形態、つまり極めて領域的な支配が確立している場合には Solar であったり、経済的な競合が行われている場合には Interlocking になるような体系を通じて、上から下へと流れていくわけである。先ほど発表の中で例示された綿花の場合はそれとは異なっている。農村生産物が市で集められて都市に流れていく場合には、卸売的機能が介在するわけで、デンドリティックなマーケットシステムを持つわけだ。基本的な農村流通システムという場合には、農村的生産物だけに限定せず、そういう都市的生産物も含みながら議論することが必要ではないか。

もう少し敷衍していうと、例えばこの研究会で東南アジア海域世界というようなことがよくいわれるが、それがここではデンドリティックなシステムに当たるわけである。それに対してインドの little kingdom とか、ジャワ的世界はどちらかというと、Solar であり、中国の場合は、上の方のレベルの中心地同士の横の繋がりもあるだけではなく、それを核として個々にきちんとした市場圏があって、経済的な交流の体系ができている。そういう上と下の両方の中心地が共に安定した姿を持っている。そういう体制が唐時代の頃からすでにできあがっており、中国社会をずっと作ってきたわけだ。そういった意味で、世界単位とか地域を認識する際の重要な視点を中心地体系が提供するといえる。

流通システム、またそこにおける政治的な支配の問題とも絡み合いながら、20世紀になれば、これらの体系が混在しあって、複雑化していく。そういう一元的な方向で変わっていくとして

いいのか、あるいは一つのシステムの変遷を幾つかの別のパラダイムの分立として捉えた方がいいのかといった問題が、地域性の形成という問題と、今日の角山さんの基調講演との間の繋ぎとしてあるのではないかという気がする。

質疑応答

加藤　ご指摘の都市生産物も含めてもう少し考えろというのは、その通りだと思う。この点を含めて、イスラム社会を専攻している人間は、流通にばかり目が向いており、生産の観点からの分析が足りない。イスラム社会を研究している者に対する不満の最大はこの点にあると思う。次いで、ラーソンは単線的な流通システムの移行を指摘しているようにみえるが、現実の流通システムの展開はそれほど単純なものではない。例えば、定期市も社会の近代化過程において一方的に常設市に移行するのではなく、状況によっては、解消されるのではなく、強化されることもある。いまエジプト農村はいわゆる社会主義体制から自由主義体制への移行の過渡期にあり、去年、完全な流通の自由化が図られた。同時に、卸売を含めた流通機構の整備、およびそれに連なる村長制度改革のような行政改革もなされている。その過程で、定期市がどのように整理されていくのかに関心がある。おそらく一方的に解消されるというのではなく、定期性が強化される市もあるだろうし、解消される市もあるだろう。

水島　国家の関わりをおっしゃったわけだが、いまの流通システムの3つの形態と国家の関わり方が、何らかの対応をすると考えるのか、あるいは市の在り方が歴史的な発展の中で、当然の結果として出てくると考えるのか。つまり市自体の問題と、国家の対応というものが何らかの地域的な差異というものをもたらすと考えるのか。

加藤　solar central-place system が「野菜市」的な市に対応するし、dendritic central-place system が「家畜市」に対応する。流通システムの類型と市の類型との間には、強い相関関係があると考える。流通システムがどのような形で時代の流れの中で展開するかについては、国家の政策との関係から個々具体的に見ていくしかない。

今岡　家畜市と野菜市というのは、経済学的にいえば、資本市場と財の市場というふうに、抽象的にいうことができる。そして国家の関わりというのは、財市場とその資本市場とは違うのではないか。財市場なら、徴税の対象になるが、現代のいろんな国家とか開発、発展等を考えると、むしろ家畜市場、すなわち資本市場といわれるようなものは、国家が保護するような形で関わっていく感じがするが、その点を教えてほしい。

加藤　おそらくその通りである。家畜市の場合には料金を取るが、家畜を課税の対象とするというよりも、市を管理する資金を確保するための徴税だと思う。1898年にカンパニーができて市の統廃合がなされ、1952年のエジプト革命後には、このカンパニーが国有化され、更に60年代には、地方の有力者に徴税請負に出されると、市の管理については変遷をみたが、この変遷も、この観点から説明できるように思われる。つまり、一貫して国家の家畜市に対する姿勢は通行税とか市場税を取るというよりは、家畜を売るための公共的な空間の管理のために料金を徴収するという側面が強いと思う。